

度

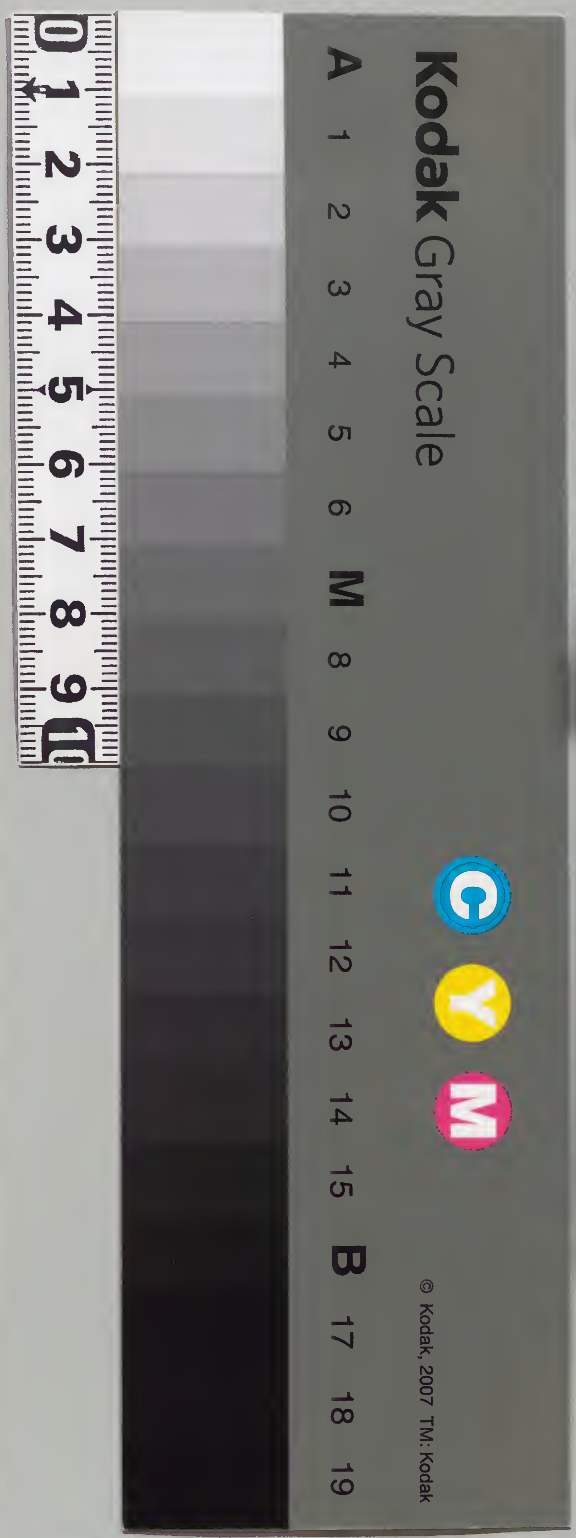
武家名目抄 職名部四之一

第六冊

庫文閣内		
五三函	三六〇九一	和
西一五架	六〇冊	書
	號	類

内閣文庫		
番號	和	36091
冊數	60 (6)	
函號	153	276

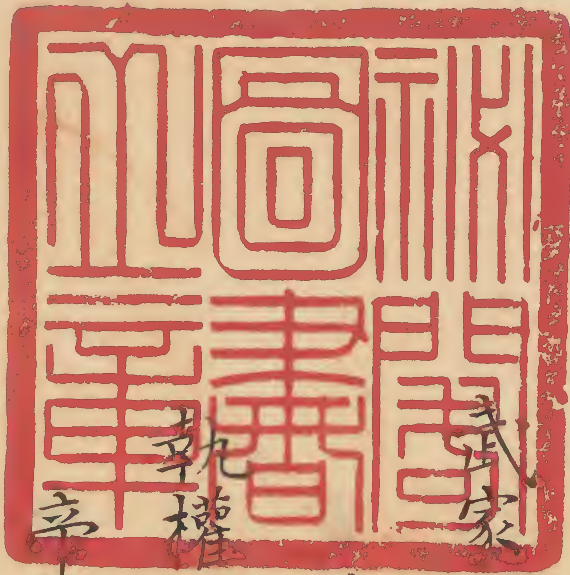
共六十



崗 241

執權

六之目



名目抄第六冊
職名部四之一

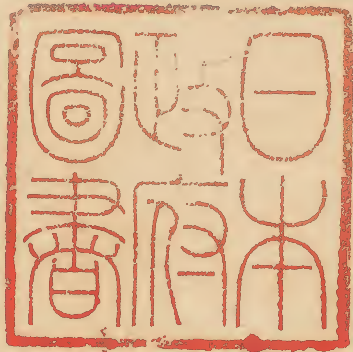
辛王編年記云鎌倉執權別當大膳大夫中

原朝臣廣元別當遠江守平朝臣時政自建

年至元別當相摸守平朝臣義時政長子

久二年閏七月

以後
保曆間記云建仁三年七月廿一日賴家左衛



門督病ヲ受ル病氣次第ニ難儀ノ間八月廿七日遺跡ヲ長子御前讓リ坂ヨリ西三十八ヶ國舎茅御前被讓畢爰ニ比企判官能員一万御前外祖遠江守時政一万御前外祖ヲ打天下ノ世務ヲ一人而相計ラハニトスル此事聞エテ九月二日能負ヲ時政ノ宿所ヘ夕ハカリ寄テ差殺畢同六日一万御前并能員子息宗朝以下小御所ニ籠テ合戦ス義時

義村朝雅等ヲ以テ大将トシテ數万騎ノ軍勢ヲ差遣シテ能負一旗悉以テ打畢剝一万御前サヘ焼死給フ同七日頼家出家セラル同十七日千万御前元服セラル實朝同廿七日實朝十二征夷將軍ノ宣旨ヲ蒙ル爰ニ頼家少減ヲ得能負ヲコソ打レメ一万ヲサヘ打ヌル莫無念也トテ時政ヲ可誅トテ諸人ヲ召處ニ同廿九日伊豆

國修善寺へ移シ奉リ又然ル間時政將軍
ノ執權トシテ天下ノ支配執行フ頼家猶謀
及ノ聞工有ケレハ次年元久元年七月十九日廿三
ニシテ打レ給フ扱時政權ヲ取間彼妻女
牧ノ女房ト申人心武ク驕レル人也ケリ
元久二年六月廿二日畠山次郎重忠誅セ
ラレケリ其故ハ重忠時政ノ智也武藏左
衛門佐源朝雅朝臣モ時政ノ智也ケリ朝

政ハ牧ノ女房ノ一腹ノ智也重忠ハ二位政子

殿尼御臺所義時以下ノ前妻ノ子ノ一腹

ノ智也中惡クシテ不思議ノ讒言有ケル

ニヤ又牧ノ女房思立支モ有ケルニヤ云

云加様ニ萬思ヒノ儘也ケル程ニ彼女房

思ヒケルハ我智ノ左衛門佐朝雅當時京

都ニ上テ時政カ代官トシテ指置昇殿シ

タリ是モ伊与入道頼義朝臣六代ノ末十

レハ將軍ニ成ニ何ノ子細カ有ヘキト
云テ當將軍ヲ失奉ラントテ時政ノ家へ
同七月廿日奉請テ湯殿ニテ失奉ラント
シケルヲ二位殿聞食テ式部丞義時時政
嫡子
ヲ召テ懸ル不思議有ト仰ラル義時急キ
馳向テ見奉ルニハヤ湯殿へ入賜ハント
シケルヲ懷奉テ御所へ入奉リケリコハ
何隻ソト仰ラル二位殿シカシカト申サ

セ給フサテハ義時トテモ心免スヘカラ
スト被仰ケルニ義時隻ノ由ヲ申延タリ
ケレハサラハ時政ヲ打テ進セヨト有ケ
レハ左ニ候子細候ハシトテ則打テ候ト
テ伊豆國ノ奥山ナル所ニ押籠ツ牧ノ女
房ヲモ同國へ則流サルト聞エシカ後
ハ不知朝雅ヲハ京都ニテ同廿七日被打
ケリ時政此隻爭カ知サルヘキナレトモ

女性ノ計ニ付ケルカ老耄ノ至カ不思議也ニ支也二位殿ノ御計ニテ義時ヲ時政ニ替テ將軍ノ執權トス相摸守トソ申ケル

吾妻鏡云建仁三年十月九日甲辰將軍家政所始也別當遠州時政廣元已下家司等著政所民部丞行光書吉書令圖書允清定成返抄遠州持參吉書於御前給之後有碗飯盃

酒之儀

按本書及帝王編年記保曆間記考を合考
まゝ今頼家將軍職をさり實朝將軍家督を相續せらるゝ及て時政所別當に補され執權此職を授けりなり但時政ハ治承四年右大將家奉義の初より内外の機勢に預り武家與これ功を多かりし是政所別當たるに或は以て公文に加署するふとありしを定むて別當に加はり内外の權勢を全くせしなり將軍次第の軍執權次第梅松論等これ諸書に時政法承以來武家乃執權あり由を記さるゝ尚初別當ありしといふも内より互に執權を掌握するなり

又云元久二年閏七月十九日甲辰牧御方

廻奸謀以於朝雅為關東將軍可奉謀當將

軍家于時遠州亭御座之由有其聞仍尼御臺所被

奉迎羽林即入御相州亭之間義時遠州所被召
聚之勇士悉以參入彼所奉守護將軍家同
日丑尅遠州俄以令落飭給十六廿日乙巳
遠州禪室下向伊豆北條郡給今日相州令
奉執權事給

又云建保元年五月三日乙巳義盛時兼以
下謀叛之輩所領收公之可被充勲功之賞
云々相州大官廣元令被申沙汰之次侍別當事

以義盛之闕被仰相州按以月侍別高和田義盛
去を起して敗死したる
義時執權其職に在る侍別高に兼補せられり
たきより後侍別高に必執權者れ兼職とあり又
他家よりつる
たき系

北條記云義時右京權大夫
前陸奥守元久二年三月

七日將軍家事奉行之承久元年依二位家
仰重奉行將軍家事同三年六月十四日傾

天位之後天下之事以命貞應元仁元三年六月十

三日卒六十二〇按吾妻鏡帝王編年記等より其
義時始て執權となり元久二年同七月廿日なり

本書二月七日とある
との處に誤ありん

帝王編年記云鎌倉執權別當相摸守平朝

臣義時自元久二年別當陸奥守大江朝臣

廣元自建保四年別當右京權大夫兼陸奥

守平朝臣義時承久元年以後元仁相摸守

平朝臣時房義時舍弟元仁元年武藏守平

朝臣泰時義時長男元仁元年六月為將軍

家執權○按義時建保四年より同六年より
いつて三年の百執權を稱せしこと吾妻鏡等の諸書絶く
見らるる一は建保三年父時政卒去るより依て義時

あつては毎に別當に職を服解しその後尚權柄を以て取るべし
別當は還補せしむる三年を経ぬるまで一はさて
承久元年よりいつて文に別當の職を稱せしむるは
本書と小條記と以て合考するに其の起るのつらふ明
るる

吾妻鏡云元仁元年六月十二日前奥州義時

病惱日者御心神雖令違亂又無殊事而今

度已及危急十三日前奥州今日寅剋令落

饒給已剋遂以御卒去年六午剋被遺遺飛脚

於京都廿六日未刺武州泰時自京都下着又相時房

州并陸奧守義氏等同下着廿八日武州始
被參二位殿御方相州武州為軍營御後見
可執行武家事之旨有被仰云々而先々為
楚忽歟之由被仰合前大膳大夫入道覺阿_{廣元}
覺阿申云延及今日猶可謂遲引世之安危
人之可疑時也可治定事也早可有其沙汰
云々前奧州禪室卒去之後世上巷說縱橫
武州者為討亡弟等出京都令下向之由依

有風聞四郎政村之邊物忘伊賀式部丞光
宗兄弟以謂政村主外家内々憤執權事奧
州後室_{伊賀守}亦舉智宰相中將實雅卿立
關東將軍以子息政村用御後見可任武家
成敗於光宗兄弟之由潛思企已為和談有
一同之輩等子時人々所志相分云々武州
御方人々粗伺聞之雖告申武州稱為不實
欵之由敢不驚騷給剝要人之外不可參入

之旨被加制止廿九日掃部助時盛相州武
藏太郎時氏武州一男等上洛兩人共就世上卷
說雖稱可在鎌倉之由相州武州被相談云
世不靜之時者京畿人意尤以可疑早可警
衛洛中者仍各首途相州當時於事不被背
武州命云々八月一日秉燭之程相州時出
仕政所此國司并武州被奉執事之後于今
無此儀廿八日武州時泰於政所吉書始九月

五日故奧州禪室御遺跡庄園配分于男女
賢息之注文武州自二品賜之廻覽方々中略
皆歎喜之上曾無異儀欵此事武州下向最
前内々支配之潛披見二品之處御覽畢後
仰曰大概神妙欵但嫡子分頗不足何様事
哉者武州被申云奉執權之身於領所等事
爭強有競望哉只可省舍弟之由存之者二
品頻降御感淚云々仍今日為彼御計之由

及披露云々

保曆間記云泰時天下ノ更ヲ行ニ此人賢
人無雙ニシテ武家ノ政道ニ五十一ヶ條
ノ憲法ヲ貞永元年七月始テ定メ行フ嘉
祿元年ヨリ仁治三年ニ至ルマテ十八ヶ
年執權ス目出度カリシ世也懸シ故ニヤ
末七代天下ノ政更ヲ行フ同五月九日依
所勞泰時出家ス
法名 觀阿同六月十七日泰時

六十二ニシテ死去畢天下惜又人ソナカ

リケル嫡孫武藏守經時于時左泰時カ跡

ヲ繼テ將軍ノ執權ス

吾妻鏡云寛元四年三月廿三日壬子於武經時

州御方有深秘御沙汰等云々其後被奉讓

執權於舍弟大夫將監時頼朝臣是存命無

其恃之上兩息未幼稚之間為止始終牢籠

可為上御計之由真實趣出御意云々左親

衛即被申領狀云々廿六日癸卯左親衛依
為執權今日令始行評定給

又云康元元年十一月廿二日己酉相州赤

痢病事減氣云々今日被讓執權於武州時長

又武藏國勢侍別當并鎌倉第同被預申之

但家督時宗幼稚程之眼代也廿四日辛亥武州

奉執權事之後始被參政所奧州并評定衆

等各布衣參會

保曆間記云康元元年十一月廿二日時頼

將軍家ノ執權ヲ政村長時義時孫陸奧守重時子等

ニ申付テ出家ス出家ノ後モ凡世ノ支ヲ

ハ執行ハレケリ弘長三年十一月廿二日

最明寺入道時頼法名道崇三十七ニシテ死去三

男時宗彼跡ヲ繼文永元年八月十日將軍

家ノ執權ス按政村ハ義時ノ四男なり康元元年三月長時ヨリ先立テ連署ヲ補タレタリ

帝王編年記云鎌倉執權武藏守平朝臣長

時重時長子康元元年十一月廿二日為執
權時賴替文永元年七月二日出家法名
專左京權大夫平朝臣政村文永元年八月
阿五年三月五日左馬權頭兼相摸守平朝臣時
日為連署宗最明寺長子文永元年八月十日為連署
執十四歲長時出家替同五年三月五日轉
權將軍執權次第云時宗相摸文永五年三月
五日始為執權云々政村左京權大夫三月五日
時宗出仕之間渡執權又連署

帝王編年記云鎌倉執權相摸守平朝臣時
宗弘安七年四月出家法名道相摸守兼左
宗果同日卒三十四号寶光寺寶光寺長男弘安七年
馬權頭平朝臣貞時寶光寺長男弘安七年
宗替宗七月七日為執權父時
保曆間記云正安三年八月廿三日貞時出
家崇演号最勝園寺入道嫡男高時未
生ノ間將軍家執權ヲ從弟相摸守師時子
右馬權頭申付夕リ時賴ノ孫武藏守宗政子也

彼師時ハ貞時聳也其上師時ヲハ時宗力
為子ケレハ如此計ケリ嘉元元年高時朝
臣生又應長元年十月廿六日最勝園寺入
道死去息男高時于時左彼跡ヲ繼今年九
歲十リケル宗宣熙時等將軍家ノ執權ヲ
シケリ

北條記云師時相模守正安三年八月廿二日
為執權應長元年九月廿二日出家同日酉

剋卒三十宗宣陸奥守嘉元三年七月廿二日
為將軍家連署應長元年十月三日轉執權
正和元年五月廿九日出家同六月十二日
卒五十熙時相模守應長元年十月三日為連
署正和元年六月二日為執權同四年八月
十二日出家同十月九日寅剋卒卅七高時相模守
正和五年七月十日為執權七十正中三年
三月十三日出家

梅松論云治承四年より元弘三年に至る百九十
四年の関東將軍家并執權の次才ハ頼朝頼家
實朝以上三代武家也又頼経頼朝以上三代ハ
治政家なり
亦宗尊惟康久明守邦以上四代ハ親王なり惣而九代也
次に執權の次才ハ遠江守時政義時泰時氏経時時頼
時宗貞時以上九代皆以將軍家の御後見として
政務を申しひ天下を治る武家相模る國の守をもて
職として一族の中ハ任用を撰ぶ着して御下文

下知考を將軍に作らるる依る御沙汰一も
元三ノ院飯弓場初庭の座真馬隨去以下此不設乃
輩諸侍ともに対してハ傍輩に儀を叙せ昇進
おいてハ家督を徳宗と号し從四品下を以て先途と
して遂にさふれ振廻るく一も政道をまよ
して佛神を尊敬し一も民をあそぶる育るる
吹風の草木をまひひるそのふとくよほひはき
けりよ下悉治るく代々目出度をもけり

然るに高時の執権ハ正和六年より正中二年
に至る十ヶ年なり是より關東の政道漸々
非義の圃を多かりけり

太平記云

武家繁昌條

頼朝ノ長男左衛門督頼

家次男右大臣實朝公相續テ皆征夷將軍
ノ武將ニ備ル然ヲ頼家卿ハ為實朝討レ
實朝ハ頼家ノ子為惡禪師公曉討レテ父
子三代僅ニ四十二年而盡又其後頼朝卿

ノ舅遠江守平時政子息前陸奥守義時自
然ニ執天下權柄勢漸欲覆四海此時ノ太
上天皇ハ後鳥羽院也武威振下朝憲廢上
事ヲ歎思召テ義時ヲ亡サントシ給シニ
承久ノ乱出來テ官軍忽ニ敗北セシカハ
後鳥羽院ハ隱岐國へ遷サレサセ給テ義
時彌ハ荒ヲ掌ニ握ル其ヨリ後武威守泰
時修理亮時氏武蔵守經時相摸守時頼左

馬權頭時宗相摸守貞時相續テ七代改武
家ヨリ出テ徳窮民ヲ撫スルニ足り威萬
人ノ上ニ被ルトイヘトモ位四品ノ際ヲ
不越謙ニ居テ仁恩ヲ施シ己ヲ責テ禮義
ヲ正ス是ヲ以テ高シト云トモ危カラス
盈リト云トモ溢レス承久ヨリ以來儲王
攝家ノ間ニ理世安民ノ器ニ相當リ給
ル貴族ヲ一人鎌倉ヘ申下奉テ征夷將軍

ト仰テ武臣皆拜趨ノ禮ヲ事トス同三年
ニ始テ洛中ニ兩人ノ一族ヲ居テ兩六波
羅ト號シテ西國ノ沙汰ヲ執行ハセ京都
ノ警衛ニ備ラル又永仁元年ヨリ鎮西ニ
一人ノ探題ヲ下シ九州ノ成敗ヲ司ラシ
メ異賊襲來ノ守ヲ堅スサレハ一天下普
ク彼下知ニ不隨ト云處モナク四海ノ外
モ均ク其權勢ニ服セスト云者ハ無リケ

リ此故ニ朝廷八年ニ衰へ武家八日ニ盛也因茲代々ノ聖主遠クハ承久ノ宸襟ヲ休メニカ為近クハ朝議ノ陵廢ヲ歎キ思食テ常ニ叡慮ヲ回サレシカトモ或ハ微勢ニシテ不叶或ハ時未到シテ黙止給ヒケル處ニ時政九代ノ後亂前相摸守平高時入道崇鑒カ代ニ至テ天地命ヲ革ムヘキ危機此時ニ顯レタリ行跡甚輕シ

テ人ノ嘲ヲ不顧政道不正シテ民ノ弊ヲ不思只日夜ニ逸遊ヲ事トシテ前烈ヲ地下ニ羞シメ朝暮ニ奇物ヲ翫テ傾廢ヲ生前ニ致サントス見人眉ヲ頻昇メ聽人唇ヲ翻ス保曆間記云正和五年高時^{時十}將軍家ノ^四執權ス頗亡氣ノ躰ニテ將軍ノ執權モ難叶カリケリサリケレトモ武藏前司泰時ノ時ヨリ代々政道正直ニ行ヒ置タリケ

レハ彼内管領長崎入道圓喜又高時カ男
秋田城介時顯彼二人ニ貞時世更申置夕
リケレハ申談ニテ如形無子細テ年月送
リケリ爰ニ高時管領長崎入道老耄ニ依
テ子息長崎左衛門尉高資ニ彼管領ヲ申
付高資政道モ心ヨカラサリケルニヤ高
時正躰ナキ儘高資心ニ任セテ天下ノ更
ヲ行フ人ノ歎キ積リケレハ關東ノ侍ト

モニモ深ク踈レテ世上ハ果敢々々シカ
ラシナト申ケリ嘉曆元年三月十三日高
時依所勞出家ス舍弟左近大夫將監泰家
宜執權ヲモ相繼ヘカリケルヲ高資修理
權大夫貞顯ニ語テ貞顯ヲ執權トス
貞顯ハ義
時子五郎實泰カ彦越後守實時
カ孫金澤越後守顯時子ナリ 爰ニ泰家
高時ノ母儀貞時朝臣後家はヲ憤リ泰家ヲ同十
六日出家セサス此更泰家モサスカ無念

ニ思ヒ母儀モ憤深キニ依テ貞時被誅ナ
ント聞エケル程ニ貞顯評定ノ出仕一兩
度ニテ出家畢同四月廿四日相摸守守時
武藏守久時男 修理大夫維貞 宗宣男于彼
于時武藏守 時陸奥守
兩人ヲ將軍ノ執權トス是モ高資力僻吏
ニタリトツ申ケル 中畧○按維貞ハ連署ナリ 上野國ニ高
氏一族新田義貞ト云者アリ武藏上野相
摸等ノ勢ヲ催シテ鎌倉ヘ馳上テ高時ノ

一族等ヲ責高時カ一族家人馳向テ去元
弘三年五月中旬ヨリ毎日所々合戦ヲ志
諸國ノ侍皆高資力無道ノ振舞高時カ止
氣ノ頼ナサニ鎌倉ヲ恨ミタリ終ニ五月
廿二日高時一族共悉滅ス昨日迄ハ天下
ノ政ヲセシカハ誰背カント云者ハ有ニ
私ノ恩ヲ蒙ル諸人モ忽ニ替テ敵ト成ニ
ニ吏浮世ノ習ト云ナカラ口惜カリニ吏

也

將軍執權次第云元弘三年五月十四日將
監入道泰家為大將軍向武州關戸合戰新田
多勢之間將監入道引退入鎌倉同十七日
相摸守守時南條左衛門尉以下各向武州
山内離山合戰十八日守時以下自害畢廿
二日鎌倉方被打落殿中以下懸火悉燒拂
之一族等或自害或落畢

梅松論云爰に先代といふ事元弘年中に滅亡
せし相摸守高時入道はふしとなり承久元年に
武家の遺跡綴りより以來故頼朝御後室
二位禪尼ははつとて公家より將軍を
中下て北條遠江守時政の子孫等が執權を
して關東に於て天下を治せりなり

太平記云中前代蜂起條今天下一統ニ歸ニテ寰
中雖無事朝敵ノ餘黨東國ニ在スヘケレ

ハ鎌倉ニ探題ヲ一人オカテハ惡カリヌ
ヘシトテ後醍醐當今第八ノ宮成良ヲ征夷將軍ニナ
シ奉テ鎌倉ニツ置進セラレケル足利左
馬頭直義其執權トシテ東國ノ成敗ヲ司
レトモ法令皆舊ヲ不改

保曆間記云元弘三年十二月主上ノ宮成
良親王ト申ニ尊氏舍弟左馬頭直義朝臣
相副テ關東八ヶ國為守護下向アリ鎌倉

將軍トソ申ケル去程ニ建武二年七月ニ

高時ノ息勝長壽丸

号相模ニ
郎時行

信濃國ノ勢

ヲ語テ鎌倉ヘ責上ル直義朝臣雖防戦無
勢ノ間鎌倉ヲ出テ成良親王ヲ奉具テ京

都ヘ上ル

按成良親王お軍の宣旨蒙りたゞ、鎌倉下向の
後、建武元年の春、直義を執權として

関東の事を沙汰
セ、ハ終ニ二年なり

太平記云

四條繩手
合戦條

己ニ楠ト武蔵守トア

ハ七僅ニ半町計隔タレハスハヤ楠カ多

年ノ本望爰ニ遂ヌト見タル處ニ上山六
郎左衛門師直ノ前ニ馳塞リ大音聲ヲ擧
テ申ケルハ八幡殿ヨリ以来源家累代ノ
執權トシテ武功天下ニ顯レタル高武蔵
守師直是ニ有ト名乗テ討死シケル間ニ
師直遙ニ隔テ楠本意ヲ遂サリケリ
又云頓宮心 替條宗徒ノ者共千餘人神水ヲ吞
テ所詮畠山國清入道ヲ執權ニ被召仕ハ毎事

六之十一

御成敗ニ隨マシキ由ヲ左馬頭基氏ヘソ訴申
ケル

花營三代記云應安五年十一月廿二日將
軍家義滿御判始御年十五御装束立烏帽子執權武
蔵守頼之朝臣著直垂 淺黄惣奉行治部少輔高
秀同七年正月十日御評定始御出座武蔵
守頼之于時 執權大膳大夫高秀佐木
普廣院殿御元服記云正長二年三月九日

御元服御祝規式以後於御會所東向法體
衆其外諸大名少々御對面御太刀鞍馬折
紙等各被進之于時執權左衛門尉入道道
端於御會所砂金又御太刀等内々被進之
依為法躰子息持國朝臣參勤可謂御佳例
乎

又云永享二年七月廿五日大將御拜賀供
奉行列出仕人々伺候次第中略次一騎打被

六之三

著狩衣畠山尾張守持國佐々木治部少輔
持光富樫介持春土岐美濃守持益左衛門
佐義淳于時執權執權郎等拾騎大惟直垂自餘
一騎打組騎無之

鎌倉年中行事云奉公中管領へ書札之事
誰ニテモ其時之執事宛所ニテ謹上卜書
云々管領ノ執權卜云事ヲ每々諸人申條
不可然其故者管領卜八只之時ノ詞ニ申

也八段之記ニハ執權トノセラル也然

間管領一人ヲハ執權ト申ヘキ也按太平記四條繩子

合戦條以下六條ニ京極倉為足利家此
執權あり為管領關東管領條を合考ス

三好別記云三好筑前守長慶後修理大丈と号根本兵

四國侍トシ河内國飯守ト左城云畿内之外

十二ヶ所ト入天下ト執權ニ被シ由中ノ病死ニ被シ

濃州無者道人状云天下ト後義繼三好令執權公儀を

茂如ト扱中ノ身而合由意起ト由内ト傳承而寄

事於左右永禄八年五月十九日清和申ヘ諸勢

乱入暫雖被為成法戦多勢ト不叶殿中に

火を急由自害ト干義輝按三好也河内長安の男
義繼を以たり以上二條ハ足利

將軍ト李世ト三好家互京ト畿内西國の事を沙汰
トをいへり但今々管領ト補せられトハ何ト當時ハ

新司代ト稱セトト地書ト云
其名類ハ不同代條ト述ト合考ト

太閤記云惟任坂本を心日向守首を村井
勝龍寺ト居外條

春長軒ト郎等見知テ秀吉ト持糸ト一夥ト

引出物賜トトリト死骸を以得出ト一首代

つ此日此岡に六月十四日明知左馬助の父二人を
磔に魚の骨よりかくすより秀吉に威光
のやま出天下に執權をい人たるべきやうに
上下媚をなすり

松原自休手録云慶長十九年六月廿四日
命大野修理渡邊内蔵助木村長門守欲誅
市正于此前内府入道常真依為母堂の外
威常ニ寓大坂誅市正後被憑大坂ノ執權

常真固辞シテ諫言及再三雖然依不得已
為遁當時難假應之

毛利家記云松田ハ北條家ノ執權セシ者
也彼家ノ諸士彼力威ニ属シテケリ最前
北條秀吉公ヲ蔑如ニセシ時モ北條力伯
父ノ美濃守ト相共ニ度々北條ヲ諫メ云
云

氏郷記云伊勢國住人千草ハ近江ノ守護

佐々木左京大夫義賢ノ執權後藤但馬守
カ弟ナリ

勢州軍記云國司執權鳥屋尾石見守文武

之達人拘公私不屈其義無雙之者也

鹿島治亂記云江戸但馬守殿ハ左金吾

ノ族臣土子ヲ遣シ執權叶氏ハ談而通泰

ハ達ス

按以上六條或々一時の称呼より不_レあ_レるは大名
諸家の僭称より幕下職員の比よりす
いと當時諸國より亦執權の稱
をとりし為_レ不見の二をとりし

按執權を君を輔佐一政務を統領勢家

重職にて公家其職掌に比し攝關大臣悉

任小尚まを依_レる或_レは理_レ決断の職と稱_レ

吾妻鏡又ハ判断其職と_レし太平記又常_レよ_レと

後見の職探題の職とも_レし軍執權次第を記
する諸書より

徳倉卓創れ時大江原元政不_レ別當として政事を

接_レりし_レり_レハ當時稱して執權とい_レりし_レれ

尚職の権輿ありて實朝が軍武職を相續あ_レる_レ不

及至て外戚の祖父北條時政に別當より
執権の職より居る威権内外を急ぐ事
是より先
時政時義
預りし事ハ本末按中ニ述ぶる事トシ然レモい
別當ニ補ふ事有ルハ全ク執権ニ補ふ事ナリト云
後其外を勇義時ニ付不脱トシて和田義盛滅亡
後其時又付不別當ニ急補せし事ハ御決以乃
由職併その一身に由ひされり子孫に由職を以
世職として文武の位承くハ條一家に有となり物中
承久以來ハ其家の成敗武將に廢置悉くこれ

進退よりわらむといふ事か——當時或執権を呼て
執事といふ能きとも執権の稱を以て本義とするか
何れ大名諸家よりいられを避て其家これ老臣を
必執事とのことなり——かり元弘ハ北條家記を
従——足利殿將軍ニ補任けり——初政のるハ
於大名あり——時の如く家令を稱して執事と
いふよりいれとて正——議定けり——か補く
たはさうに其執権後叙ふともいふあり——

庶苑院殿の法よりひびきく後領と称せるありむと
なりりれハ執權執事等れ稱ハ絶くふ如かり
能きともさく儀式の日記又規矩の記録等
に執權と記をを为例とせり此れ穩念以来れ
古格を追ふ、あなり能る代後領の稱や盛
あり、後ハ舊儀を之忘る者多くありし
かく後領の陪臣をも僭稱して執權とふべ
しきとあり
此文は引く處穩念年中
行事にせり、分明なり、 後領以て

應仁文明以後ハ程さくそ弊諸事及ひ大名諸家
ふとす執權名をこゝろふふなりいいて記て
終にち武家古法を失ふむれり
吾妻鏡
建長四年
二月廿日穩念ハ行人ハ條家の使言して上洛の所ハ
當將軍被拜執權申上皇力一三宮之間有由向之由
依申請也、何り、に執權を拜し、頼嗣が軍政務を
拜せしむるをいふなり、ハ條家のこと、或いふ、其、す
畢竟、いふ、對して請申さる、拜なる、是、穩念の意
あり、執權を拜し、より、より、と、い、え、り

武家名目抄第六冊

六之廿八

